

落ち着いて作業ができる子

—作業学習の指導を通して—

岡 本 嘉 子

1. 対象児のプロフィール

- (1) 生徒名 Y・W(女) 昭和44年9月6日生(高等部2年生) 自閉的傾向
IQ36以下(WISC 昭和56年5月実施)
SA6:9 SQ42(S-M社会生活能力検査 昭和60年11月実施)
父、母、姉の4人家族。本校小学部より入学し現在に至る。

(2) 個人の実態

- 環境の変化に適応しにくく、単独で行動することが多い。
- 表出言語が少なく、自分の気持ちを適切に表現しにくいこと、こだわりが強いこと、忍耐力があまり身に付いていないことにより、要求等をパニックという形で示すことがある。
- 興味のある作業内容なら、ある程度は継続して取り組める。
- 自分のしたくないことは、周りの状況がどうであれ、取り組もうとしない。
- 強制するとパニックを起こして、その場から逃げようとする。
- 物の数を数えることが好きである。100ぐらいまでならきちんと数える。

2. 個人目標の設定と指導方針

(1) 個人目標の設定

Y・Wの行動を観察した結果、自分のしたくないことについてはやりたがらず、強制するとパニックを起こして、友達と同じ行動がとれないことがある。しかし、この“したくないこと”はただ単に、横着や嫌いということでしたくないだけではなく、自信がないこと、見通しがつかないことも関わっていると思われる。また、切る、数えるといった活動や、作業の中でも好きなことなら、ある程度は取り組めることがわかった。

従って、適切な課題を与え、具体的に指示することで、見通しを持って取り組めるようにしたり、Y・Wの得意なことで自信を持たせることができれば、Y・Wの“したくないこと”が少しずつでも“したいこと”にかわり、友達と同じ行動がとれるようになるのではないかと考えた。そこで、Y・Wの気に入っている作業学習(陶芸)で「落ち着いて作業ができる」という個人目標を設定し、次のような指導方針をたてた。


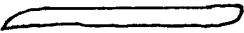
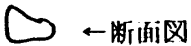


(2) 指導方針

- ① 具体的に指示をし、見通しを持って取り組み易くさせる。
- ② 粘土の“紐作り”が得意であるので、それを生かした作品を多く作る。
- ③ “数える”という好きな活動を取り入れて作業させる。
- ④ 指示したことができたなら賞賛し、意欲づけをする。

3. 指導の実際

作業学習（陶芸コース）で、Y・Wは主に“壺作り”“箸置き作り”を行う。

(1) 壺作りにおける、Y・Wの活動と手だて

作業工程	Y・Wの活動（4月当初）	手だて
① 円型の底をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 形がきれいな円型でない。（→㉗） 厚さがまちまちである。（→㉘） 	㉗ なるべく円型に近い方が作り易いので、指導者が円型になるように切る。 ㉘ 平らになるよう厚い部分を指で指してたたかせる。
② 粘土を台の上で転がして、紐を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 細長い均等な太さの紐を作ることができるが、細くなりすぎる場合もある。（→㉙） 一度紐を作ってはそれを半分に折り、また転がして、紐作りを楽しんでいる。 	㉙ あまり細いとつなぎ難いので、直径1.5センチ程の太さになったら、声をかけて転がすのをやめさせる。
③ 紐の手前を手のひらでたたき、傾斜をつけて平たくする。  ←断面図	<ul style="list-style-type: none"> 手のひらで紐をたたくことをしない。（→㉚） 	㉚ 「トントンしてごらん。」と言い、たたくことを促す。
④ 最初に作っていた底の側面に紐をつけ、離れないようにつなぐ。  この境界をつなぐ。	<ul style="list-style-type: none"> 紐をのせるだけで、つなごうとしない。（→㉛） ひとまわりしても、紐の余った部分を切らず、次の段にのせてしまふ。（→㉜） 	㉛ 「キュッ、キュッ」と言いながらつないで見せ、手をとってさせる。 ㉜ 次の段にのせると隙間ができるので切るように手をとって指導する。
⑤ ②、③の要領で紐を作り、④の内側にのせて、つなぐ。  この境界をつなぐ。	<ul style="list-style-type: none"> 内側でなく真上にのせるので、だんだん広がっていく。（→㉝） 	㉝ 内側にのせるよう手をとって指導する。
⑥ ⑤を繰り返して、積み上げていく。	<ul style="list-style-type: none"> 細く丸い紐を真上に積み上げていくため、どんどん広がり、上の方が重たくなって、高く積み上が 	㉞ ㉗、㉘、㉙、㉚、㉛をその都度、繰り返し指導する。

	<p>るまでに崩れてしまう。(一〇〇)</p> <p>○ 崩れる度にやり直すが、何度やり直しても途中で崩れてしまうので、壺作りとは関係のないことをして、粘土で遊びだす。</p>	
--	--	--

① 壺作りについて、以上のように、具体的な指示をその都度与え、それを繰り返し行うことにより、作業工程の定着を図り、Y・Wの作業への取り組みの変容をめざした。

その結果、3ヶ月余り経った7月中旬には、次のような変容がみられ出した。

作業工程① — きれいな円型にはならないが、ほぼ平らにすることはできた。

作業工程② — 太くて、ほぼ均等な太さの紐が作れたした。

作業工程③ — 声かけをしなくても、たたくことはでき出したが、傾斜をつけることは、まだできない。

作業工程④ — 声かけをしなくても、自分で隙間を見つけて、つなげるようになった。

作業工程⑤ — 「内側だよ。」という声かけにより、内側にのせることができるようになった。

作業工程⑥ — 紐も太くなり、つなぐこともだいたいできるようになったので、途中で崩れたり、隙間だらけになることも徐々に少なくなってきた。4月当初と比較するとだいぶしっかりした作品が作れるようになった。



4月当初の作品




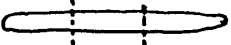
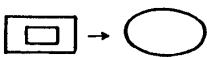



7月中旬の作品

② 作品のできばえによって、Y・Wの作業に対する取り組み方も、わずかではあるが、変わってきた。

⑥ 紐をつなぐ作業は、Y・Wにとってあまり得意な作業でなく、励ましてもなかなか取り組みうとしなかったが、「キュッ、キュッ」と声かけをすることにより、自ら「キュッ、キュッ」と言いながら取り組む姿も見られ出した。

⑦ 「紐を作る→紐をたたいて平らにする」「紐をのせる→紐をつなぐ」の工程は、ほぼ定着したようであり、ある程度自分で見通しを持って取り組んでいるものと思われる。その結果途中で手を休めたり、よそ見をしたり、粘土を丸めて遊んだりということは、以前に比べて少なくなってきた。

(2) 箸置き作りにおける、Y・Wの活動と手だて

作業工程	Y・Wの活動	手だて
① 粘土を台の上で 転がし、直径1.5 センチ程の紐を作 る。 	<ul style="list-style-type: none"> 指導した太さより、細い紐を作 る。(→㉗) 	㉗ 適当な太さになったら、「ストップ」 と言って、粘土を転がすのをやめさせ る。
② 5～6センチの ところで切る。 	<ul style="list-style-type: none"> 指導した長さより長く切る。 (→㉘) 	① ゲージを一つ作っておき、ゲージと 比べさせて、切る部分を示す。
③ 両端をきれいに まとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 指導した通り、上手にできる。 (→㉙) 	㉗ 替める。
④ 頭、ヒレ、尾の 部分を指の腹で押 さえて作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 指で示したり、言葉で指示する と上手にできる。自分一人です るようになると※の部分、全体の 真ん中あたりになり、頭部が長く なる。(→㉚) 	④ 最初の数回は指摘したが、形のこと であり、特に問題はないと思われるの で、Y・Wの作り易いように、作らせ る。
⑤ 目とエラをつけ る。裏に水を少し つけて、取れない ように軽く押さえ る。 	<ul style="list-style-type: none"> 目を喜んでつける。 エラをつけるのを忘れることが ある。(→㉛) 水をつけることを忘れがちであ る。(→㉜) 	④ エラの部分を指さして気付かせる。 ㉜ 水をつけて押さえることは、忘れる 度に指摘し、徹底させる。
⑥ 竹べらで、口、 ヒレ、背の模様を 入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 指示した通りにはないが、自 分なりの模様を入れる。指示して いない所にも入れる。(→㉝) 	④ 特に指示することはせず、自分なり の形、作り方を定着させる。 ㉝ 一つ出来上がる度に、数を数えさせ て意欲づけをする。

① この“手作りはせ”については、第1時間目に一緒に作り、作り方を教えた。最初の3個は一緒に作り、4個目からは口頭で指示するという方法をとったが、自分なりに作る手順を覚えて作り出した。

② 紐作りの要領で、作業工程①の紐を作るため、細長い紐になりがちであるが、形については特

に指導を加えなかったこと、一つの作品を作るのに、いろいろな作業を要したこと、一つの作品を仕上げるのに数分しかかからず、出来上がりをすぐに見ることができたことなどの理由により、箸置きを作り始めた日からはとんど手を休めたり、よそ見をしたりすることなく取り組むことができた。



「手作りはぜ」

- (3) 一つの作品が出来上がる度に作品の数を数えさせたが、この活動を取り入れることにより、“数える”ことを楽しみに作業に取り組むことができた。

4. 考察と今後の課題

(1) 「壺作り」については、具体的な指示を繰り返し与えることにより、Y・Wの作業に対する態度は以前に比べ、手を休めたり、よそ見をすることが少なくなってきた。また、作品が途中で崩れることもなく完成するようになり、Y・Wも自信を持って取り組めるようになったのではないと思われる。しかしまだ、気分がのらず、作業に集中できないこともあるので、今後もこの方法を繰り返し、作業工程を定着させ、見通しを持って作業に取り組めるようにさせたい。また、数多くの作品を作ることで、さらに自信をつけさせて行きたい。

(2) 「箸置き作り」については、「手作りはぜ」に取り組んだ。これは、作る工程もわかり易く、5分程で完成し、出来上がりをすぐに見ることができるということから、取り組むのに適当な課題であったと思われる。また、一つ出来上がる度に、“数える”という活動を取り入れることにより、喜んで作業に取り組むことができた。「手作りはぜ」については、比較的短い期間で作業工程をマスターし自分なりの「はぜ」が作れるようになった。今後は、 \circ 形、大きさをそろえる。 \circ 量産する。のような目的を持って取り組ませたい。

(3) (1)、(2)の取り組みを通して培った自信を、作業学習だけでなく、学校での他の領域・教科や家庭での生活にどう反映させるか、また他の生徒との関わりをどう拡大させるかが、今後の課題である。



壺作りの様子



箸置き作りの様子